

時代をつくる文化ラボ

(小谷英生・小山花子・澤佳成・和田悠)制作

『リアル世界をあきらめない

—この社会は変わらないと思っているあなたに—』

はるか書房 2016年11月 A5判 181頁 ¥1728 (税込)

井出大輝

本書は特に、学生に向けて書かれている。著者らは大学教員として学生と向き合うなかで、その多くが自分の力では何も変わらない、何が正しいのかも分からないという「現実」観にとらわれていることに問題意識をもつ。したがって本書は、どうすれば彼らが自分にとっての現実^{リアル}を捉え、動き出すことができるのかという問いに対して、筆者なりの答えを示すものと言ってよい。

章構成は、以下の通りである。小谷英生が若者の自由から逃れようとする語りを問題視し、真の自由を人文学の復権に求める第1章「自由のラブソディ」、小山花子が民主化の進んだ現代でも拡大する極端な格差を問題視し、人々を政治的無関心に誘導する機構を捉えた第2章「民主主義のアンチエイジング」、和田悠が子育てを通しての男性ジェンダーの相対化と、保護者・地域の人々との交流を通じて保育行政を問うに至る政治的社会的過程を示した第3章「生活世界のアクチュアリティ」、澤佳成が息苦しさを感じつつもなかなか行動を起こせない現代において、「国分寺崖線の緑を守り、調布三・四・一〇号線を考える会」の活動に、新たな民主社会のかたちを見出した第4章「環境へのマニフェスト」である。

他にも、各章には広く社会問題や現状に対する筆者らの問題意識が示されたコラム、セクシュアル・マイノリティや保育士、障がい者との対話によって社会の問題を炙り出すダイアログが、本書の中盤には話題のキーワードから世の中をシニカルに読み解く定義集＝ワキペディアがある。

全体を通して言えることの1つは、それぞれが自分の生活世界という局所にこだわって問題を捉え、議論を展開していることだ。それは次の3点の特徴と関係する。1つは、局所にこだわるから

こそ、著者らの語りには学術的な文章にはない生々し^しがあり、そうすることで個々が自身の現実を語り、時代をつくっていくという理想を著者自ら体現している点である。例えば小谷は、自身が掲げる「自由」を文章の中で実践している点は興味深い。次に、局所へのこだわりは具体性を重視する点にも表れる。例えば澤は、国分寺崖線の自然を守る活動に密着し、市長や公務員の立場も考えて交渉する点、お茶くみを一人に任せない点といった具体的な方策が、大事な森を守ることにつながることを示した。本書にはこういった、些細なことが社会をよくも悪くもするといったことを実感できる記述が、豊富にある。最後に、読者の距離が近い点である。注や引用を用いないこともあって、初学者が読みやすいよう工夫されている。その姿勢は、特に小山が政治的無関心をただ批判するのではなく、著者を含め我々が陥りがちな思考体系を捉えようとする点に表れている。

また、社会の問題を捉えるマクロな視点も忘れていない。特に各章ではコラムが付せられ、自己責任論や子どもの貧困などの社会問題も議論される。例えば和田は、自らの子育て経験に依拠して「三歳児神話」を批判している。個人の生きづらさと社会問題の直結を実感することで、問題を個人に帰属させる傾向に歯止めをかけ、社会を変えることの切実さを説いているのだ。著者らの出版までの5年間の議論が、読者にも希望がもてる、以上の周到な記述を生んだのだろう。

一方で、第2章で紹介された、格差・貧困によって、世界中の非常に多くの命が今も失われているという事実^じに評者は絶望を感じざるを得ない。それは、格差を生む社会構造に身を置く私たちが、構造的な流れのままに戦争を支えていた人々と本質的には何も変わっていないからだ。あの世代が当時、何の罪悪感も抱けなかったのと同じように、私たちは現状に何の罪悪感も抱けず、この構造に生きてきたのである。私たちは、平和な時代をつくっている、よりよく社会を変えているというリアリティだけをつかまされて、見えない自明の部分では従順であらざるを得ないのではないか。続編ではこの点について、より深い議論を聞きたい。